
ゆきあいの空

芹沢 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆきあいの空

【Nコード】

N5467W

【作者名】

芹沢 忍

【あらすじ】

ネズミが紫苑と別れてからの話です。

NO. 6を遠く離れ、ふとしたきっかけから紫苑を思い出し苦悩するネズミ。ネズミは旅空の下でどんな想いを抱いているのか。初めて出会った嵐の夜を思い返し、ネズミは紫苑への想いを再認識する。

といった展開です。途中から「ネズミを泣かす!」といった志向になってしまいました(へーへ;)

(前書き)

※注意※ 技法として原作の文章を引用している部分がありますことをご了承ください。

高層に流れる雲と沸き立つように天を目指す雲。

夏と秋。異なる季節の雲が行き合うように空に浮かぶ。

まるでこの間までの自分と紫苑のようだ。

浮遊する者と留まる者。

かつてのN.O. 6に留まった紫苑は天を目指す雲のように、今では人々の上に立たされている。重要な地位に立ち、紫苑は何を思い歩んでいるのだろうか。そう思いネズミは顔をしかめた。

「自分がこんな感傷的な人間だったなんて思いもしなかったな」

熱く湿気を含んだ風が髪をなぶる。うっとおしげに髪を払いネズミは人影の無い荒野を歩いていった。

目の前にあるのはまばらな緑と立ち枯れた木々――病んだ大地だ。加護を失った世界は脆く儂い。

この惑星で人類が生存できる地域は六ヶ所のみである。この六番目の地区はどこよりも豊かな自然条件に恵まれてはいたが、それでもこの有り様だ。

足元の倒木を蹴ると衝撃により簡単に碎ける。細かい破片を散らしながら木は大地に還った。

風に舞い上がる粉状の破片を目で追い、ネズミは空を見る。白い雲が目に入る。

――ネズミ。

幻聴か？ 紫苑の声を聞いた気がした。空の青が透ける白雲で紫苑を思い出したのだろうか。記憶を払うように頭を振るが、餓えたような胸の乾きが食欲に紫苑を求めてやまない。

「クソッ！」

苛立ちを口にし、八つ当たりするかのように木の破片を踏み砕く。後悔はしていない。だが、自分の一部が紫苑に囚われ続けている。ふとしたことで炎の^{ほむら}ように立ち昇る焦燥感に苛まれる自分が腹立たしい。

「自由になったんじゃないかったのか」

NO・6は既に無い。自由になる為に自分が瓦解に加担した。それなのに結局は別のものに繋がれている。彼の地を遠く離れるにつれ、その実感が強まっていた。

——おまえさんの負けだよ、ネズミ。

いつかイヌカシが言った言葉が胸を過ぎる。自嘲気味に笑うと、うそぶくように言葉を紡ぐ。

「今なら認めてやってもいい」

相手が目の前に存在しないから言える言葉だ。

思えばイヌカシは初めからネズミの変化に気付いていた。自分でも気付いていなかった変化にだ。あんな成りでも女だ。感は鋭い。そんな所が大嫌いだと思っていた。だが西ブロックでは金さえ払えばいい仕事をする奴だった。

紫苑に何かを嗅ぎ取って犬みたいにじゃれついていたイヌカシの姿を思い出すと、胸に枳然としないものを感じた。苛立ちが増し、進んでいた脚が萎える。

「——少し休むか」

誰に言うとも無く呟いてから立ち止り周囲を見回すと、朽ちた建物が目に入った。基礎部分が剥きだしになっており、寝心地が良さそうに見える。そこには人工物を排除しようとするように大地に力強く草が茂っていた。

近づき荷物を放る。超繊維布を枕代わりにまとめるとネズミは基礎部分にゴロリと横になった。

降り注ぐ日差しに目を細め右手を翳す。息を吸い込むと青葉の匂いを強く感じた。

——紫苑が働いていたのは公園の管理事務所だったな。
ふと我に返り、絶句して額に手をやる。

> i 3 0 5 9 5 — 9 2 0 <

——何でここまで紫苑に囚われる。

遠く離れているのに、時折、近くに気配を感じる程に生々しく、
紫苑を思い出す。

時に人を魅了し縛る紫苑の声。普段は庇護欲を掻き立てるように
不安定に揺れる瞳が、にわかに強い意志を宿す。その瞳に真っ直ぐ
射られるとネズミは紫苑に恐れを抱いた。

——怖い。

何が怖かったのだろうか。紫苑が得体の知れないものになんて変わって
行くような気がしたのか、見知らぬ他人に感じたからなのか、今で
も判らない。ただ怖いと感じた。

決して逃げたのではないが、紫苑のその底知れぬ力に怯んではい
たのだろう。別れの日は後ろ髪を引かれるよりも安堵感の方があっ
た。それなのに今はどうだ。情けなくも女々しく思い出す割合の方
が高いのだ。もしかすると安堵感など、もう微塵も残っていないの
かもしれない。

チチチッ。

ハムレットとクラバットが寝転がったネズミの上に駆け上がる。

「おまえら、いつもどこに隠れてるんだ」

自分の身体の上で呑気に毛づくろいを始めた小ネズミたちの頭を
指の腹で撫でてやる。気持ち良さそうに頭を上げる小ネズミたちに
少し気分が和んだ。こうやって小ネズミに触れるようになったのも
紫苑のせいだ。一緒に暮らした数カ月で随分と感化されたものだど
溜息をつく。

ベッドに腰掛けながらシェークスピアの戯曲を朗読する声。小ネズミたちが静かに紫苑の声を聴く。自分も時々ベッドに寝転がりながらその声を聴いた。朗読が終わると、紫苑はお礼のように小さな観客を指で撫でた。その表情と仕草は甘く優しかった。

彼らはそれを覚えており、旅に出てから何度も撫でてくれとせがみ、ネズミは仕方なく同じことをしてやるようになったのだ。そうしてやると小ネズミたちが何だか愛おしくなった。西ブロックでは感じなかった感情である。自分の感情に初めは戸惑ったが、慣れると案外いいものもあった。

西ブロックの食うか食われるかの世界は、今はどうなったのだろうか。

小ネズミたちと戯れながらそんな思いが浮かんた。出発前は大きな変化は無かった。だが今は大きく変わっているだろうと信じたい。

「信じたかったって？ 随分甘い言葉が浮かんたな」

チチ、チチチッ。

呟いたネズミにクラブバットが問いかけるように鳴いた。小首を傾げて顔を覗き込んでくる。笑いかけてやると照れたように耳を掻き荷物の陰へと駆けていく。ハムレットがそれを追いかけて身体の上から飛び降りると微かな重みが消えた。それを物悲しく感じる。

両手を翳して目を塞ぐ。

何も考えずに眠りたかった。

温まった基礎材のコンクリートとやや強い日差し。

周囲にだけ意識を向けながらまどろむ。

葉ずれの音が涼やかに子守唄を唄っていた。

どれくらい経っただろうか。

ひやりと湿った匂いがする。

雨が来る。

跳ね起き、ネズミは急いで身支度を整えた。

あっという間に空が暗くなり始める。

風が草を揺らし始めている。

超繊維布を飛ばされないようリュックに放り込んでからそれを背負い駆け出す。

直後、肌に滴を感じた。

かなり大きな雨粒が当たる。

風が強い。

超繊維布を被っていたとしても避ける場所を確保しなければ濡れになってしまう程だ。雨の汚染具合も気にかかる。出来れば極力濡れるのを避けたい。確か少し前に低木の茂みがあったはずだ。上手く囲えば立派な避難場所が出来上がるだろう。

降り出した雨は乾きかけた土を叩く。

立ち昇る湿気と雨の匂いがネズミの古い記憶を刺激する。

薄暗い空も強い風も、全てがあの日を思い起こさせた。

死ぬのかと思っていた。——そこに射した光が、紫苑だ。

惨めな死に方をするのかと全てを諦めかけ、ずぶ濡れになり、まるでぼろ布のようになってネズミはうずくまっていた。追われ狩られる獣のように身を竦ませ、救いを求めて天を仰ぐと、彷徨う瞳が一点で止まった。光を見た気がしたのだ。

窓が開いた。

出てきた少年が両手を大きく広げる。

声が聞こえた気がした。甘く自分を誘う声。

幻聴だったのだろうか。それでも構わないと思った。

両手を広げた少年が嵐に向かって叫ぶ。

その声はネズミに生きろと叱咤しているように聞こえた。

——それから、ここへ来いと。

導かれるように足が向いた。

開け放たれたままの窓。

雨を含んだ髪が重かった。傷ついた腕も重い。それでも疲れ切った身体を意志の力で前に進めた。滴を垂らしながら窓を目指す。もつれそうになる脚を励ますように叩き、前へと動かした。

開いた窓の室内に踏み込むと先程の少年がいた。自分と呼んだ声の主だ。ネズミがそろりと近付いても気付く素振りさえ見えない。少年の無防備さにネズミは思わず笑った。

笑い声に気付いた少年が振り向き、小さく悲鳴を上げる。だが自分を認めた彼の目には好奇の色があった。不思議そうな表情で少年は手を伸ばし触れようとすする。ネズミは反射的に相手の喉元に指を食い込ませ声低く脅した。

「動くな」

身長差のために下から突き上げるような姿勢になる。力の加減が判らなかったが、かろうじて少年の動きは封じられたようだ。

苦しい息のもと、それでも少年は強気の滲む声で言った。

「なるほどね。——こういうこと、慣れてるんだ」

少年の言葉で頭が冴える。

油断せずに少年を観察した。

どう見たって何も知らない呑気な子供——

ネズミの中に苛立ちが募る。

睨むように少年を見上げ奥歯を噛み締める。

「手当してやるよ」

殺気立った様子をものともせず、少年が落ち着いた口調で言った。
ネズミは困惑の表情を浮かべた。

「ケガしてるんだろ。手当、してやるよ」

——何を言ってるんだ。手当だと？

治安局に通報されるとしか思っていなかった。こんなことはあり得ない。半信半疑で少年をねめつける。

「手当をする。血をとめなくちゃいけない。て・あ・て、わかるだろう？」

——本気か？

力が緩む。

その時インターホーンから女の声がした。
それで少年の名前が知れた。

——シオン。

シオンは母親に現状を一切告げない。緊張したように話しをしていたが、極力何も無いように振る舞っていた。

風変わりな人間だ。こんな奴がいるなんて信じられない。

気が抜けたら腕が力無く落ちる。ネズミは自分の身体を支えるのがやっとであると思い出した。全身の力が抜けると、足元が崩れた。辛うじてベッドで上半身を支えるようにして床に座り込む。

自由になったシオンが何か運んできた。何かの箱らしい。蓋が開くと薬品の匂いがした。自分を診る気らしいが、ネズミには抵抗す

る気力は湧かなかった。嬉々として傷を「縫う」と宣言された時は少し怯んだが、ネズミを救いたいと思っているのは確かなようだ。必死の形相で道具を扱う顔を見てそう感じた。

「あんた、変わってるな」

「なんで？」

「おれの名前も聞かない」

「ああ、そうか。でも、こっちも名乗ってないから、お互いさまだし」

「シオンだろ。花の名前？」

「そう、母さんが雑木や野の花が好きなんだ。そっちは？」

「ネズミ」

「は？」

「名前」

「ネズミ……なんか違うけどな」

「違う？」

訝しげにネズミは眉を寄せる。覗き込んでいた紫苑が戸惑ったように頬を赤く染めた。

「さっ、縫うぞ」

不自然に大きな声で宣言してから、紫苑は縫合糸を手にした。緊張しながらも自分の行いに興奮しているのが傍目にも判るほどに紫苑は高揚した様子だ。だが手際は良い。手技をぼんやり見つめながら他愛のない話しをした気がする。

凭れたベッドがネズミを誘うように軋んだ。疲れた身体がその誘惑に負けそうになる。

「気持ちよさそうなベッドだ」

気が付いたら口にしていた。

「貸してやるよ。その前に気がえろよ」

清潔なシャツとタオルと抗生物質の箱がネズミのひざの上に放られた。色合いが派手なチェックのシャツ。センスを疑うようにシャツを見て贅沢な不平を述べた。

「趣味悪くない、これ？」

シャツをつまみ上げる。

「血だらけで破れててとことん汚れてるシャツより、ずっとましさ」
確かにその通りだ。黙ったまま服を脱ぎ捨てシャツを羽織った。

そのタイミングを見計らったように、目の前にマグカップが差し出される。なみなみと湛えられた液体が湯気を上げ甘い香りを放っていた。受け取り一口すする。ココアだった。口の中に甘みが広がると自然と笑みが浮かび、思わず呟く。

「うまい。縫合手術より、よっぽどうまいや」

「そういう比べ方すんなよ。初めてにしては、うまく縫えたと思ってんだから」

「あんた、いつもこうなの？」

「え？」

「誰に対しても、こんなに無防備なわけ？ それとも純粹培養のエリートってみんな、警戒心ゼロなのか」

ココアのカップを両手で包むようにして暖を取りながらネズミは続けた。

「侵入者に対して、恐怖とか警戒心を持たなくても生きていけるんだ、あんたたちは」

「警戒心はある。恐怖心もある。危険なことは、怖いしやだ。二階の窓から断りもなく入ってくるやつを善良な市民だと信じるほど、お人よしでもない」

「だったらなぜ？」

ネズミにとっては当然の疑問だった。紫苑はなぜ自分を助けているのだろう。ただの馬鹿なのか、それとも肝が据わった大物なのか。どちらにしろ変わった人間なのは確かだ。普通ならばとうに警報装置を鳴らされ治安局に連行されている。

——面白い。

紫苑という人間に興味が湧いた。

そんな心を読むように、紫苑が怖い顔でネズミを睨み返す。

「きみが凶暴そうな大男なら、すぐに警報装置を鳴らしてた。でも、きみはチビで女の子みたいで、今にも倒れそうな顔色をしていた。だから……だから手当てをした。それと」

真摯な瞳で紫苑がネズミを見つめる。暫し沈黙があり、焦れたネズミが呟くように続きを促した。

「それと？」

「それと……血管縫合を実際にやってみたかったんだ」

照れたような表情でそれが嘘だと判る。恐らく紫苑自身も呆れるほど単純な理由でネズミを助けたのだろう。どうやらお人よしの馬鹿の方らしい。

ネズミは、肩をすくめココアを飲みほした。手の甲でくちびるをぬぐい、ベッドのシーツを軽くなでた。抗いがたい眠気がネズミを襲っている。

「ほんとうに眠ってもいい？」

自分でも驚くほどに幼い問いかけが漏れた。紫苑が柔らかな笑みを浮かべる。

「いいよ」

「ありがとう」

紫苑だったら大丈夫だ。なぜだかそう確信を抱いた。

シーツに沈み込みネズミは目を閉じる。紫苑がそれを確認してから部屋を出ると、ネズミは部屋の照明を落とした。明るい場所は慣れていない。

闇の帳が降りるとやっと一息つけた心地がする。倒れ込むように再びベッドへ横になるとそこで意識が途切れた。

人の気配と腹を刺激する匂いで目が覚めた。

「灯りをつけるな」

威嚇するように気配の方へ唸る。目を向けると紫苑の姿が闇に浮かんだ。

「何も見えないじゃないか」

「見えなくていい」

トレイを持ち困ったように紫苑が立ち尽くしている。暗闇に怯んでいるように見えた。

匂いに刺激され胃がよじれる様な感じがした。

「いい匂いにする」

「シチューとチェリーケーキ持ってきた」

歓迎の意を表すようにネズミが口笛を吹く。

「食べるか？」

「もちろん」

「真っ暗な中で？」

「もちろん」

明らかに闇に慣れていない様子で、紫苑がそろそろと足を前に出す。暗がりの中をこんな不器用に歩く人間を初めて見た。ネズミは笑いながら紫苑がトレイを落とす前に自ら受け取った。ひっくり返されては堪らない。ベッドの上で胡坐を組み、トレイをそこに引き受ける。

温かい湯気を立てるシチューと自家製のチェリーケーキ。

食べ物を目にして胃が焼けるように感じられる。スプーンに手を伸ばし、シチューを一口含む。体中に染みるようだ。身体が煽るように次の一口を求める。ネズミは休む間もなく手を動かし続けた。

その間も紫苑と会話を続けていたが、さほど耳に入ってはいなかった。反射的に応じているといった具合だ。

チェリーケーキの方にも手を伸ばす。これは蕩けるようにうまかった。貪るように食べ切り、一息ついていると何かひっかかる言葉を耳が拾った。

「え？」

「ここが理想的な街だなんて、思っ

てない」
息を潜めて声を殺す。これがNO.6に暮らす人間の言葉だろうか。口元が笑むを作る。

「あんた、変わってるな」

「そうか？」

「変わってるよ。そんなこと超エリートさんの言うことじゃない。市当局にばれたら、ヤバイんじゃないの？」

「うん、かなりヤバイ」

「逃亡中のVCをかくまって、当局への連絡を怠った……これも、ばれたらヤバイ。ヤバイなんてもんじゃないぞ」

「うん」

会話の流れを追うにつれ、自分の顔が青ざめていくのが判る。思わず紫苑の腕を取りする程に動揺していたが、触れた相手は自分の心配を他所にしネズミのことを聞いてくる。

複雑な気持ちになった。助かった安堵感なのか、自分が紫苑を心配しているのか、こんなお人よしがいるという信じられない事実に困惑しているのか、何にせよ、大きく気持ちが揺さぶられているだけは確かだった。

紫苑は興味を持ったら頭で理解しないと気が済まないらしい。質問が後から後から口を突いて出る。

誰しも触れられたくないことはある。好奇心は仇になる時もあるのだ。

こういった時には必要以上に相手に踏み込むと命取りになる場合があるとは思わないのだろうか。

得体の知れない初対面の人間に、警戒心を抱くよりも興味を引かれていた紫苑を、ネズミは嘲笑うようにからかった。

「うるさい」

機嫌を損ねた紫苑がベッドのネズミめがけて飛びかかってきた。雑食性の野生動物に温室育ちの植物が勝てるはずもなく、ネズミは簡単に紫苑をベッドへと押し倒した。

軽々と紫苑の身体を奪い上位を取る。ネズミは空いた手でスプーンを掴むと、柄の部分を抵抗できない獲物ののど元にあて、横に引いた。

「これがナイフなら」

茫然としている紫苑の顔にネズミは己の顔を寄せた。

耳元に吹き掛けるようにささやく。

「あんた即死だぜ」

紫苑の、のどの筋肉がぴくりと震えた。

少しは危機を自覚しただろうかと思っただのもつかの間、組み伏せた紫苑から嬉々とした声が返った。

「すごいな。これ、コツとかあるんだ？」

「え？」

「どうやったら、こんなに簡単に人の身体が動かなくなるわけ？
押さえつける神経の場所とかあるの？」

押さえつけていた力がゆるむ。変なやつだ。自分の命が惜しくはないのか。

おかしい。呆れるを通り越すとおかしい気持ちになるのか。

腹の底からおかしいと思っただのはどれくらい振りだろう。込み上げる笑いに身体の力が抜け、崩れるように紫苑の上に倒れかかる。

「おかしい。あんた、ほんとうにおかしい。絶対、天然だ」

背中に両腕が回される気配がする。本来ならば隙を見せること無く飛び退くくらいはするのだが、紫苑相手ではどうも調子が狂う。

されるがままにしていると背の素肌に温かいものが触れた。それが紫苑の手のひらだと気付く。だが振り払う気は起きなかった。何だか心地がいい。

紫苑が身体の下で呟く。

「やっぱり……発熱してる。抗生物質、飲んだほうがいい」

「いいよ……もう、眠たい」

「熱が出たままだと体力が消耗する。すごく熱いぞ」

「あんたもけっこう温かい」

人の温もりを忘れて久しかった。味わうようにネズミはそのままゆっくりと目を閉じた。

「生きてる人間って、温かいんだ」

素肌に広がる温もりと、身体の下にある鼓動がネズミを眠りに誘

う。熱のせいもあるのかもしれない。意識がたゆたい始める。何も考えられなくなりネズミは温もりに溶け込むように堕ちていった。

夜明け前に目覚めて驚いた。意識を失う直前とほとんど変わらぬ状態で目の前に紫苑が眠っている。

間近にある穏やかな寝息とその寝顔。

ネズミにとって人前で無防備に眠るなどあり得ないはずであった。それがいとも簡単に警戒を解いて眠りこけるなんて。

「どうしようもないバカだな」

自分と紫苑、二人に向かってひとりごつ。

治安局にマークされるかもしれないことも厭わずにVCを助けるなんて、この先これで生きていけるのか。紫苑を見つめながらネズミは考え込んだ。

——目を離すのは危険か。

覚悟を決めてから、そつと身体を起こし身を引く。紫苑は小さく身動きしてから、再び規則正しい寝息をたて始めた。ネズミはそんな紫苑を不思議そうに見下ろした。

無邪気な顔で危なっかしいことを平気でする。いや、無邪気だからこそなのか。ネズミには解らなかった。

とにかく、ここからは去らなければいけない。

昨夜、紫苑が使っていた救急ケースを手取る。タオルに包んで襷たすき掛けすると、自分呼び込んだ窓へと向かう。開け放つと朝の凜とした空気が触れた。

まだ日が昇る前、闇が僅かに残る時間帯だ。嵐の名残が周囲に宝石のような水滴を纏わせていた。それが見え始めた陽光で徐々に輝きを増していく。

鮮やかだった。鮮やか過ぎて目に染みる。

世界はこんなに鮮やかだったろうか。

窓枠に手を掛け外へ一步踏み出す。それから振り返った。昇り始めた太陽が、紫苑の眠るベッドへ光を投げかける。穏やかな寝顔がほのかに光に縁取られた。

平和な光景だった。そう。平和な光景だった――

滴が落ちる。髪を伝い肌に流れる。

嵐は思ったよりも早くネズミを襲っていた。

低木の茂みに辿り着くと、ネズミは慌ただしく作業に取り掛かった。風に揺れる上部の枝を寄せロープで固定していくと、こしらえは荒いが小さな避難場所が出来た。途中で集めてきた大きめの木片を幹の合い間に差し入れ、上部と木片の無い側面に超繊維布をあてる。それから休むのに邪魔になる木を根元から切り払い足元を整えた。

濡れた両袖が鬱陶しい。肩まで託し上げてからようやく腰を下ろす。

葉を叩く雨の音が煩いくらいに響いた。風も強く騒がしい。紫苑と出会った日を思い出しながら、ネズミは濡れてしまった自分の肩を抱き寄せるようして身を縮めた。

> i 3 0 5 9 6 — 9 2 0 <

疼くように痛む、胸が疼くように。鮮やか過ぎる記憶が胸を焼くのだ。

あの日なぜ窓が開いた。

窓が開かなければ今の自分はいない。
紫苑がいなければ今の自分はいない。

紫苑と出会わなければ今の自分は――

きつく自分を抱きしめる。紫苑という存在がなければ、自分は死んでいた。いや、自分だけではなく、全ての人間がいなくなっていたかもしれない。

希有な存在だと思っていたが、全ての人間を救うような希有な存在だとは思ってもよらなかった。

エリウリアスがチャンスを与えたのは紫苑にだ。他でもない紫苑にだけだ。

――見てみたい。紫苑の行く末を。

自分が願ったのはそれだけだった。しかし気まぐれな女王はゲームを楽しむようにネズミの願いを受け入れた。

自分が紫苑に重荷を背負わせた。

感情的で見境無く人に手を差し出す。その様は危なっかしくネズミはいつも気が気ではなかった。ネズミの心配を知ってか知らずか、紫苑は時折、無茶とも思えるような行動を取った。

浅はかさに腹が立ちネズミから仕掛けた言争いや喧嘩も多かった。そんな時に紫苑が口にする言葉は信じられないくらいに甘かった。

砂糖菓子みたいに甘い理想。

だが、気が付けばその道を探る自分がいたのも事実だ。

人狩りを知った後の紫苑は、ネズミでも震えるような冷酷な面を持った。それを得る為に紫苑は西ブロックへ落ち延びたのかもしれない。そう、今の位置に立つために課せられた紫苑への試練として。時として指導者は非情な選択を迫られる場合がある。今の紫苑なら

ば、それが出来る。有事の時には冷静に判断を下すだろう。

老の言っていた運命という言葉がネズミは嘲笑った。だが、結果はどうだ。まるで似合いの言葉ではないか。

ネズミは唇を噛みしめた。

だからこそ別れなければならなかった。

紫苑は気付いていただろうか。自分の感情が大きく揺れる原因に。ネズミはきつく目を閉じた。

銃を構えた紫苑の姿が消えない。

「指導者が一人の人間に固執するようになったらどうなると思ってんだ」

吐き捨てるように言う。決して紫苑本人には言えない言葉であった。言ったところで紫苑が自分に詰め寄るのは想像に難くない。だが、紫苑の主張は今や許されるものではない。

紫苑は託されている。――人間の存続を。

重いのだ。課せられたものが。出逢った時には想像もつかなかった重荷。結果的に背負わせたのはネズミだった。それとも紫苑の方に巻き込まれ、そう仕向けられたのだろうか。自分たちで選び取ったと思っていたものが全て何かによって導かれていたのだとしたら、その何かにネズミは言いたかった。

――なぜ紫苑だった。なぜ。

他の人間だったら自分はここまで乱れない。ネズミは俯き、込み上げて来る何かに耐えた。だが、それは堰止

められず、雨の滴と共に肌を伝い流れた。外の嵐同様、ネズミの内も荒れていた。翻弄されまいと、なお、身を締めうずくまる。

嵐の音は容赦なく記憶を呼ぶ。記憶に触れれば何度でも想ってしまう。

冷えた唇に指が触れた。紫苑は気付いただろうか。別れ際のキスの本当の意味に。気付いていてもネズミが残した言葉に縋りついているのかもしれない。

「紫苑」

それは意図せず口を突き、堰を切ったように溢れる。

——紫苑、紫苑、紫苑、紫苑……

押さえても漏れる名に喘ぐ。今は風が訪れるまで待つしか出来ない。ネズミは膝を抱え声を殺した。

嵐が過ぎ去れば歩きだせる。そう自分に言い聞かせるように頭の中でネズミは繰り返した。

隙間からの光が目元を射り、ネズミはそれで嵐が去ったことに気付いた。

布を剥ぎ取り、ロープでたわめた枝を緩めていくと、徐々に澄んだ空気が流れ込んだ。木片を抜き取り木々を解放すると茂みを出て、ネズミは大きく息を吸い込み伸びをした。縮こまっていた身体を伸ばすとあちこちが軋むようだった。

風が先程とは違う。濡れた肌が冷えるくらいに温度が下がっている。

見上げると秋空が広がっていた。嵐と共に夏空は去ったらしい。

——紫苑。

あの嵐の夜は今でも鮮明だ。激しく通り過ぎ鮮やかに記憶に残る。一時の出会いと別れ。それが生き方を大きく変えることもある。紫苑との出会いはそれであつた。自分の中から決して消すことは出来ない。

紫苑が創るのはどのような都市になっていくのだろう。

もし、No. 6のような歪んだ怪物を再び呼び起こしたならば、再び紫苑にまみえることが出来る。

だが、そんなことにはならない。他の人間が道を違えるのを紫苑が許さないだろう。

——だからこそ苦しい。

目を眇めてネズミは晴れ渡った空を見た。

遠く離れた都市を想って。

いや、そこにいる人物を想って。

今、嵐は止んでいる。

荷物を担ぎ上げると、ネズミは風に向かうように歩き出す。

季節はこれから秋へ、それから冬へと向かう。

共に過ごした季節へと。

秋風がそれを静かに告げていた。

（後書き）

原作を読んでからどうしてもやりたいた思っていたネズミ視点での初会合シーン。アニメ化とイラスト提供して下さった天甲斐エコさんのおかげで書くことが出来ました。何年前からそう思ってたんだよ……7、8年前からだな。書いてたらそこだけが異常に長くなりそうで頭を抱えました（笑）

紫苑の花言葉は調べた方も多いかと思いますが「遠方にある人进行う」「思い出」「君を忘れない」「追憶」など。完全に始めから決めてたんですね、あさのさんはあのラストを（へーへ；）

原作をガッツリ読みながら文章を書いて、アニメ版で確認作業をしていたら、イメージが結構違う。原作版だがついて食べ物食べてるイメージあるんですけど、アニメ版ってそれが無いや。ということ、アニメだけを見ている方にはかなり「？」な感じがするかもしれません。

トゥルルン♪（↑解かる方には解かるネタ） テーマソングは f l u m p o o l の『残像』にして下さい。書き終わってから聞いたら結構ハマってました（へーへ；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5467w/>

ゆきあいの空

2011年9月15日03時12分発行